

道徳

道徳科における改訂のポイント

1 「考え、議論する道徳」への転換

「道徳の時間」は、これまでも学校における道徳教育の「要」としての役割を果たし、成果を上げている学校がある一方で、次のような課題も指摘されています。

- ・歴史的経緯に影響され、いまだに道徳教育そのものを忌避しがちな風潮があること
- ・他教科に比べて軽んじられていること
- ・発達の段階を踏まえた内容や指導方法となっていない
- ・主題やねらいの設定が不十分な単なる生活経験の話合いや、読み物の登場人物の心情の読み取りのみに偏った形式的な指導が行われている

このような状況を踏まえて行われた「特別の教科」化は、多様な価値観の、時には対立がある場合を含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道徳としての問題を考え続ける姿勢こそ道徳教育で養うべき基本的資質であるという認識に立ち、発達の段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童生徒が自分自身の問題と捉え、向き合う「考え、議論する道徳」へと転換を図るものです。

2 道徳科における「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善

道徳教育においては、他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を育むため、「考え、議論する道徳」を実現することが「主体的・対話的で深い学び」を実現することになると考えられます。道徳科における学習・指導改善における工夫や留意すべき点については、道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議（H28. 7. 22）や新学習指導要領及び解説等を踏まえつつ、中央教育審議会答申（H28. 12. 21）において、「主体的・対話的で深い学び」の視点に沿って次のように整理（一部抜粋）されています。

「主体的な学び」の視点	「対話的な学び」の視点	「深い学び」の視点
児童生徒が問題意識を持ち、自己を見つめ、道徳的価値を自分自身との関わりで捉え、自己の生き方について考える学習とすることや、各教科で学んだこと、体験したことから道徳的価値に関して考えたことや感じたことを統合させ、自ら道徳性を養う中で、自らを振り返って成長を実感したり、これからの課題や目標を見付けたりすることができるよう工夫すること。	子供同士の協働、教員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えたり、自分と異なる意見と向かい合い議論すること等を通して、自分自身の道徳的価値の理解を深めたり広げたりすること。	道徳的価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方について考える学習を通して、様々な場面、状況において、道徳的価値を実現するための問題状況を把握し、適切な行為を主体的に選択し、実践できるような資質・能力を育てる学習とすること。

【注】 道徳科における具体的な学習プロセスは限りなく存在し得るものであるため、様々な工夫や留意点を「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つの視点に分けて考えるのではなく、これらの視点を手掛かりに、児童生徒の発達段階や特性、指導内容などに応じて適切で効果的な方法を選択しながら、工夫して実践できるようにすることが重要です。

3 道徳科における「見方・考え方」

「考え・議論する道徳」を目指す新学習指導要領の改訂の趣旨に照らして考えると、道徳科における「深い学び」の鍵となる「見方・考え方」は、道徳科の目標に示されている「様々な事象を、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、自己（人間として）の生き方について考えること（※括弧内は中学校）」であると言えます。

「見方・考え方」とは、「各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方」のことであり、それぞれの教科等で重視される学習課程といえます。児童生徒にとっては「見方・考え方を働かせる」とは、各教科等で重視される学習活動を行うということになります。

道徳科においては、その学習活動が道徳科の目標に示されており、その活動を充実させることが、道徳科が目指す「よりよく生きるための道徳性（道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度）」を育てることにつながると考えられます。

道徳科における学習評価のポイント

1 評価の基本的態度

道徳科のねらいは、道徳教育の目標に基づき、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によって道徳性を養うことです。

道徳性とは、人間としてよりよく生きようとする人格的特性であり道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲及び態度を諸様相とする内面的資質です。このような道徳性が養われたか否かは、容易に判断できるものではありません。しかし、道徳性を養うことを学習活動として行う道徳科の指導では、その学習状況や成長の様子を適切に把握し評価することが求められます。

2 道徳科の評価の在り方

- 数値による評価ではなく、**記述式**とすること。
- 個々の内容項目ごとではなく、**大きくりなまとまり**を踏まえた評価とすること。
- 他の児童生徒との比較による評価ではなく、児童生徒が**いかに成長したか**を積極的に受け止めて認め、励ます**個人内評価**として行うこと。
- 学習活動において児童生徒がより**多面的・多角的な見方へと発展しているか**、**道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか**といった点を重視すること。
- 発達障害等のある児童生徒が抱える**学習上の困難さ**の状況等を踏まえた指導及び評価上の配慮を行うこと。
- **調査書に記載せず**、入学者選抜の合否判定に活用することのないようにすること。

3 道徳科における評価の意義



指導に生かす評価の観点とは？

【道徳科の授業に係る評価の観点】

教師が自らの指導を振り返り、指導の改善に生かしていくことが大切であり、授業の評価では、改善につなげる過程を一層重視する必要があります。

【評価の観点（例）】

- 学習指導過程は、道徳科の特質を生かし、道徳的価値の理解を基に自己を見つめ、自己の（人間としての）生き方について考えを深められるよう適切に構成されていたか。また、指導の手立てはねらいに即した適切なものとなっていたか。
- 発問は、児童（生徒）が（広い視野から）多面的・多角的に考えることができる問い、道徳的価値を自分のこととして捉えることができる問いなど、指導の意図に基づいて的確になされていたか。
- 児童（生徒）の発言を傾聴して受け止め、発問に対する児童の発言などの反応を、適切に指導に生かしていたか。
- 自分自身との関わりで、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考えさせるための、教材や教具の活用は適切であったか。
- ねらいとする道徳的価値についての理解を深めるための指導方法は、児童（生徒）の実態や発達の段階にふさわしいものであったか。
- 特に配慮を要する児童（生徒）に適切に対応していたか。

児童生徒の成長につながる評価の観点とは？

道徳科の児童生徒の評価に当たっては、学習活動において児童生徒が道徳的価値やそれらに関わる諸事象について他者の考え方や議論に触れ、自律的に思考する中で、次の点を特に重視する必要があります。

①一面的な見方から**多面的・多角的な見方へと発展しているか。**

②**道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか。**

これらの点を重視し、道徳科の**学習活動に着目して**評価します。

【道徳科の学習状況（学びの姿）（例）】

- ・道徳的価値のよさや大切さについて考えようとしている。
- ・道徳的価値について、一つの見方ではなく様々な角度から捉えて考えようとしている。
- ・道徳的価値について、自分のこれまでの体験から感じたことを重ねて考えようとしている。
- ・授業で学んだ道徳的価値のよさを感じ、これからの自分の生き方に生かそうとしている。